ふくやま文学館友の会だより

2024年（令和６年）２月20日発行

第23号

〒７２０－００６１
広島県福山市丸之内１－９－９
ふくやま文学館友の会事務局
ＴＥＬ（０８４）９３２－７０１０
ＦＡＸ（０８４）９３２－７０２０

ふくやま文学館友の会研修旅行「岡山の探訪」に参加して

土屋純子

ふくやま文学館友の会研修旅行は、コロナ禍も過ぎた秋晴れの二〇二三年十一月七日に実施された。会員二十三名の参加があり、大型バスでゆったりとした座席のなか午前八時過ぎの出発となった。岡山まで道の駅での休憩をはさみ、最初の目的地「吉備路文学館」に到着した。館長の出迎えを受け館内を二班に分けて案内していただいた。還暦を迎えた重松清氏の「重松清ヒストリー」の特別展は一階にあり、こころのふるさとである岡山での開催となった。館長も同じ大学出身で、熱のこもった解説をしていただき、有意義なひと時をすごした。重松作品は、その年代における〝今〟におきた出来事、社会問題、また「家族のかたち」を物語として描かれていて、読者は惹きつけられる。「幸せの風は、さまざまの方角から吹いてくるのだと思います。」（しげまつ語録）

二階は、吉備路とゆかりのある「吉備路近代文学の七人展」を開催され、有本芳水、内田百閒、坪田譲治、福原麟太郎、岸風三楼、高嶋哲夫、小手鞠るい、の展示品を鑑賞した。そして、館長のはからいで、隣にある整備された中国銀行の日本庭園を案内していただいた。

次に、岡山城へと行った。岡山城は、三層六階建ての城で、天守閣の外壁に漆黒の下見板が張られていることから「烏城」、輝く金箔瓦から「金烏城」と呼ばれている。岡山城は、歴代三家、池田家、宇喜多家、小早川家、の家紋を配置して、不等辺五角形を模した外枠で囲んで、岡山城のリニューアルロゴとしている。そして今、人が集う「新岡山城」となっている。昼食は、後楽園に向かいあう老舗の岡山プラザホテルの瀬戸内海の食材を使用した御膳をいただいた。

昼から、夢二郷土美術館にて、竹久夢二作品コレクション、夢二の世界観を体感できる展示を鑑賞した。なかでも心に響いたことは、関東大震災を自らの足を運んで描いた震災跡のスケッチである。夢二の美人画も素敵である。

色白の細身の姿に凭じゅすの
帯結びたる夢二の女は

また、夢二の「宵待草」は後楽園の詩碑に刻まれている。

宵待ち草うたへば哀し現世（うつしよ）に
逢ふことのなき君を想へば

純子

岡山後楽園にはバスにて移動し、庭園に建立されている詩歌句碑と、顕彰碑を、ボランティアの方に案内していただいた。後楽園の象徴となっている鶴も見学した。庭園もきれいに管理されていて、松も菰を巻き、秋から冬へと季節の移ろいを感じさせた。

帰路、農マル園芸吉備路農園に寄り、買い物を楽しんだ。会員のみなさまと、岡山での文学などにふれ岡山探訪の有意義な一日を無事に過ごした。

～吉備路ゆかりの文学者の〝心ばえ〟を偲んで～

吉備路文学館館長　明石英嗣

吉備路文学館は、昭和六十一年（一九八六）中國銀行第四代頭取　守分勉によって同行創立五十周年事業のひとつとして開館した。広島県東部の備後地区および岡山県全域を「吉備路」と定義し、地域にゆかりのある近代以降の文学者を顕彰する登録博物館として産声を上げた。顕彰する文学者は、内田百閒や坪田譲治、吉行淳之介など近代日本文学を代表する作家、小川洋子や重松清、あさのあつこなど今の時代の文学界を牽引する作家など百五十名を超え、今なお増え続けている。

吉備路文学館では、このように膨大な数の地域ゆかりの文学者を顕彰するため、開館以来、年に4回の特別展・企画展を1F、2Fの2つの展示室を利用して年8展示行ってきた。本来であれば文学者一人一人の単独の特別展・企画展を行うべきではあるが、顕彰する文学者の数からすれば、困難である。そうしたことから、たとえば「猫」をテーマとして猫好きの作家、猫を題材とした作品の作家といった共通のテーマに基づいた展覧会や、生誕〇〇年、没後〇〇年といった節目を迎える作家を「生誕・没後展」として紹介する企画展を開催して、一人でも多くの文学者を知ってもらえる展示を心掛けてきた。過去には、「校歌」や「災害」をテーマとした展覧会も行った。

こうした展覧会を開催するにあたっていつも目指していることは、展覧会を鑑賞された人に、それぞれの文学者の「心ばえ」を感じてもらい、その人が心豊かになっていただくことだ。ここで言う「心ばえ」とは、文学者の考え方であり、生き方であり、それぞれの作品の裏付けになっているものなのかも知れない。たとえば、坪田譲治にとっての児童文学は、「子どもへの愛」であり「ふるさとへの愛」であった。小川洋子が作家になったキッカケは、中学生の時に出会った『アンネの日記』だった。これからも文学者それぞれの「心ばえ」に触れていただける展覧会にしたいと考えている。

岡山市は令和五年十月、「ユネスコ創造都市ネットワーク」の文学分野で国内初の認定を受けた。「文学を通じて心豊かなまちづくり」を目指すのである。近時、世界情勢は、至る所で紛争が起き、混とんとしている。坪田譲治は初の昔話集『鶴の恩がへし』(新潮社／昭和十八年)を太平洋戦争の真っただ中に出版し、あとがきで「昔から伝承されている昔話は、正しい子供、良い子供、強い子供を育てる」としるしている。

吉備路文学館は、三年後開館四十年を迎える。パンフレットの中で「吉備路出身およびゆかりの文学者の著書・書簡・原稿等の展示を通じて、その文学者に親しみ、心ばえを偲び、精神を汲みとってください」とある。これからも、たくさんのゆかりの文学者を応援団に、文学者の「心ばえ」を通して「世界へつながる文学創造都市おかやま」に相応しい文学館、地域のみなさまに愛される文学館を目指したい。

『三浦しをん著『舟を編む』を読んで』

清川英子

これは『玄武書房』という小さな出版社が、ことばの大海を渡っていくという意を込めて『大渡海』という国語辞書を作り上げるまでの十五年間の闘いを綴ったものである。

辞書編集部といっても、主軸の構成員はたった三名。監修を担当するのは定年よりずっとまえに大学の教授職を辞し辞書編纂の道ひとすじの松本先生。その教え子で先生を支え、編集部を引っ張ってきた荒木。定年間近の荒木が後継者として見つけ出し、今中核を担っているのが馬締光也（まじめみつや）。荒木は社外編集者としてずっと関わっていく。他に西岡さんと佐々木さん、岸辺さんの小所帯である。

言葉は生ものである。松本先生や編集部員は、どこにいても気になる言い回しや若者言葉を見つけては、日々新たな用例採集カードを作っている。これは辞書作りには欠かせない。監修者やいろいろな分野の原稿執筆者、編集者、紙づくりの職人、市井の協力者など多くの人が関わっている。

辞書作りに没頭する馬締は、恋愛には縁がなかった。ところがある日、学生時代から住んでいるオンボロアパートに、大家さんの孫娘で板前修業中の林香具矢さんが引っ越して来た。一目見た時から恋心を感じた。その思いをどうしても口では伝えられない。そこで恋文を書いた。菅茶山の七言絶句あり漱石の漢詩あり、万葉集からの和歌があり、中国詩人の七言律詩があるという便箋十五枚にも及ぶものであった。香具矢さん、「解読に時間がかかったわ」と言いながらも受け止めてくれた。これだけの幅広い教養と知識を持っていればこそ、辞書作りにはうってつけの人だろう。

新しく加えた見出し語が、用例が妥当かどうか、原典に忠実か検討しなければならない。国語学や国文学などを専門とする大学院生が学生アルバイトとして大勢雇われ、その任にあたる。たくさんの人の叡智の結晶が辞書なのである。しかし言葉は動いている。最近でも「引く」（異様だと感じてあきれる）「寒い」（冗談などがつまらない）「詰んだ」（どうしようもなくなった）「話を盛る」（よりよく見せようとする）などの新しい表現が幅広い世代に定着しつつある。辞書が完成しても終わりではない。「まじめ君、明日から早速『大渡海』の改訂作業をはじめるぞ」と荒木が告

げるのであった。

金色の帆ふくらませ進みゆかん
言葉きらめく大海原を　英子

作者三浦しをんは『舟を編む』の中で、「馬締の蔵書は、自室のみならず、早雲荘の一階にある部屋を軒並み占拠している。」とあるが、これはまさしく自分の姿らしい。「積み上がる本とは希望なのだ。明日も生きて、これらの本の中から一冊読みたいな」「知らなかったことをまだまだ知りたいな」とか自分自身や未来への希望の象徴なのだ。「しをんワールド」にもっともっと触れてみたいと思うのである。

文学の旅路　第二回

ふくやま文学館友の会会長　杉之原壽美子

この度の「文学の旅路」は松尾芭蕉の「奥の細道」を取り上げました。始めに山本健吉の「奥の細道」を紹介します。（『増補改訂新潮日本文学辞典』新潮社、一九八八年一月掲載）

〔奥の細道〕　俳諧紀行文。没後八年たった元禄十五年に刊行された。門人曾良を伴って元禄二年三月二七日、深川を出船してより、奥羽・北陸地方を経て大垣に至る約二四〇〇キロ、七カ月に及ぶ大旅行を簡潔な文体に結集させたわが国紀行文学の代表的作品。「月日は百代の過客にして行きかふ年も又旅人」という有名な言葉をもってはじまり、千住で見送りの人々に、「行はるや鳥啼うをの目は泪」の留別吟を残す。知人、門弟もほとんどない長途の奥羽旅行は、はじめから艱難が予想され、「道路に死なん、これ天の命なり」というのもあながち誇張ではなかった。「漂泊の思ひ」にじっとしてはいられなかった詩人の詩心を汲むべきである。『曾良随行日記』と照合すれば、相当意識的な虚構のあとがある。挿入した句も後年改作推敲したものが少なくないが、「夏草や兵どもが夢の跡」（平泉）、「閑さや岩にしみ入蝉の声」（立石寺）「さみだれを集めて早し最上川」（大石田）、「荒海や佐渡によこたふ天河」（出雲崎）、「一家に遊女もねたり萩と月」（市振）、「わせの香や分入右は有磯海」（越中）、「あか〳〵と日は難面も秋の風」（金沢）その他、正風純熟の句が多い。「一家」の句の前文にしるす同宿の遊女の哀話がまったくの虚構であることは曾良の『書留』に記載のないことで知られる。奥羽の行脚は、芭蕉の句風を一変し、円熟境に近づかせたが、その不易流行の説も旅中に腹案のなったものであることは、去来の『贈晋子其角書』などからもうかがわれる。（後略）

「日光に芭蕉を想う」

五十年ぶりに日光の東照宮を訪ねた。六月の日差しが参拝古道の杉並木に遮られ、蒸し暑さは軽減したが、鬱蒼とした木々からは威圧感を感じる。「卯月朔日御山に詣拝す。」から始まる芭蕉の『奥の細道』六日目の文章が浮かんできた。

芭蕉は一六八九（元禄二）年陰暦四月一日にここを訪れているがこのような木々の繁りはなかったかも知れない。

「この御山を二荒山と書しを空海大師開基の時、『日光』と改給ふ。千歳未来をさとり給ふにや、今此御光一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖、穏なり。猶、憚り多くて筆を差し置きぬ。」と東照大権現の威光に対して賛辞を呈しながらおそれ多いので筆をおくとして「あらたふと青葉若葉の日の光」と詠んだ。絢爛たる建造物の美しさと清新な自然の美が芭蕉には東照宮の尊さとして感受されたのだろう。

気が付くと境内は観光客と修学旅行生が溢れ、私は、いつのまにか拝殿、本殿内に向かっていた。質素な造りではあったが探幽などの手になる天井の竜の画は忘れ難い。坂下門を潜り石畳の奥社への参道をひたすら登る。凍結防止のため、岩を刳り貫いて一枚の敷石にしたという。この東照宮の造営に如何ほどの人力と財力を費やしたのだろうか。至る所に諸大名寄進の立札があり将軍家の威光だけを賛美できない私であった。

詩歌あれこれ

短歌

将来は広島のやうな復興をと願ひし献花の
ゼレンスキー氏
わが友は原爆症で兄亡くし自ら被爆の
語部となる　土屋純子

短パンに突っ掛けゆく内科医は夫のわがまま
許してくれる
びわの木の天辺の実が熟れて落ち
蟻のおこぼれ朝ごと拾う　日石輝子

俳句

ぎこちなく剪定終へる二人の息子
室咲のシンビジウムの幸の色　奥山清美

ゴーギャンの日焼の女画布を出る
夕焼を跨いで砲火迫り来る　塚本みや子

記念樹の桜舞い散り父母しのび
観覧車想い出乗せて散る桜

松尾里子（竜胆）

詩

願い
――平和への――

安達道子（一瀉千里）

ペンの先から　あふれた感情は
ポタポタと　紙の上に　にじむ
やがて　深いなにものかの奥底へと
ゆらゆらと沈んでゆき
長い時間　熟成され
時が来たら
白い鳩となって
世界へ飛び立つ
おさえるな　その感情を
解き放て
世界へ

岡﨑忠前会長「文化賞」を受賞されました

二〇二三年十二月九日、令和五年度善行市民表彰式において「文化賞」を受賞されました。ふくやま文学館開館当時より、友の会を結成、ふくやま文学館の支援と文学活動に努められました。文学者ゆかりの地を訪ねたり、作品に親しみをもてるよう講演や文学研修旅行を実施されました。会員一同心よりお喜び申し上げます。

木下夕爾賞表彰式に参加して

杉之原壽美子

主に福山市、三原市からの詩の応募からたくさんの入賞者が選ばれた。特に特選の入賞者は自作朗読で、より心が伝わった。私に強い印象をもたらした「おたまちゃんの大へんしん」は子供の心が伝わるだけでなく詩を通して言葉選びの大切さを学んだ。

二〇二三年四月～二〇二四年三月「友の会活動内容」（文学館行事一部含む）

一、友の会だより（第二十三号）発行

二、総会・講演会

日時　四月十五日（土）
演題　「大河ドラマ『どうする家康』の見どころ」
講師　岡﨑　忠（友の会前会長）

特別企画展（文学館主催）

没後三十年　井伏文学のふるさと―在所のことが気にかかる
日時　四月二十八日（金）～七月十七日（日）

三、講演会（文学館と共催）

日時　五月二十日（土）
演題　「井伏鱒二とふるさと栗根」
講師　世良正文（広島大学名誉教授）

四、井伏鱒二没後三十年鱒二忌（文学館と共催）

日時　七月八日（土）
演題　「井伏鱒二先生、つれづれに。」
講師　松尾静明（詩人・禅宗僧侶）
朗読　朗読の会「虹」による井伏鱒二著「朽助のゐる谷間」の朗読

特別企画展（文学館主催）

あんびるやすこ作品展
日時　九月十五日（金）～十一月二十六日（日）

五、友の会文学探訪研修旅行

日時　十一月七日（火）
内容　『岡山の探訪』
吉備路文学館、岡山城見学、後楽園内の詩歌句碑、顕彰碑をめぐり散策、夢二郷土美術館作品鑑賞

第九回「文学講演会」

日時　十二月三日（日）
演題　直木賞受賞作　門井慶喜「銀河鉄道の父」を読む
講師　岩崎文人（ふくやま文学館館長）

特別企画展（文学館主催）

没後三十年　座談の名手・井伏鱒二
日時　十二月二十二日（金）～三月三日（日）

第九回「文学講座」

日時　一月二十七日（土）
演題　大江健三郎「ヒロシマ・ノート」を読む
講師　岩崎文人（ふくやま文学館館長）
朗読　朗読の会「虹」による「生命の木」の朗読

ふくやま文学館・文学講座（全3回）

第一回　島本理生「ファーストラヴ」（直木賞受賞作）
日時　一月十四日（日）
講師　岩崎文人（ふくやま文学館館長）
第二回　西村賢太「苦役列車」（芥川賞受賞作）
日時　二月二十四日（土）
講師　前田貞昭（兵庫教育大学名誉教授）
第三回　風良ゆう「流浪の月」「汝、星のごとく」（二〇二〇年、二〇二三年本屋大賞受賞作）
日時　三月十六日（土）
講師　綾目広治（ノートルダム清心女子大学名誉教授）

編集を終えて

編集委員・杉之原・土屋・永久・藤井・村上

一月一日の能登半島地震でお亡くなりになられた方々のご冥福を心からお祈りするとともに被災地の一日も早い復旧を願っています。

皆さまのご寄稿本当にありがとうございました。今後とも皆さまのご意見ご要望をお聞かせください。どうぞよろしくお願いいたします。